

## 1 出席委員

上野 葉子	本校中学部保護者(PTA会長)
小田 浩伸	大阪大谷大学准教授(学識経験者)
竹内 恵子	あいほうぷ吹田施設長(福祉施設関係者)
田中 成和	NPO 法人豊泉家コミュニティクラブ、社会福祉法人福祥福祉会(前PTA会長)(福祉施設関係者)
辻 優子	吹田市立わかたけ園園長代理(福祉教育施設関係者)
飯尾 明子	(社)箕面市社会福祉協議会在宅ケアセンター(地域自立支援協議会担当)(福祉行政関係者)
北川 拓	池田子ども家庭センター地域相談課総括主査(児童相談関係者) <代理出席> <宇治野委員は所用のため欠席>

学校からは、校長、教頭、首席、進路主事、小学部代表、中学部代表、高等部代表、地域連携部代表、個別の教育支援計画委員会代表、高等部主事、中学部主事、小学部主事が出席

## 2 会議録

開会および校長あいさつ、各委員の自己紹介

地域連携部代表：今年から委員会から地域連携部(校務分掌)となり、小中学校への支援とネットワーク作り、校内支援をしている。小中学校支援は府の整備事業という形で行っている。昨年はPTAと進路と一緒に地域別相談会を行い、地域にある相談事業所の方と顔をつなぐことができ、その中でネットワークを広げている。それとともに個別の教育支援計画を作成している。

個別の教育支援計画委員会代表：個別の教育支援を話し合う必要性が高まりこの委員会が出来た。昨年度からモデルケースを抽出し、様式、システムを整えてきて本年度より実施している。1枚目の資料はプロフィール表で、本人の全体像を保護者の方が記入し、それをもとに担任が作成した。2枚目の資料は障がいにより二つのパターンがあり、目標と経過を長期的視野のもと3年先の目標を見越して、教育の立場から出来ることを考えていこうというページ。個別の指導計画の実態把握では、普段の生活から子どもたちのADL、反応、やり取り、人とのコミュニケーション手段を持っているか、行動面の特徴、普段の訓練施設での検査結果、配慮事項などを記入する実態把握表になっている。最後に「保護者の願い」を記入してもらう。実態把握や保護者の願いをもとに具体的な一年間の計画について作成したものが「個別の指導計画」となっている。担任が作成するが、いくつかの課題を上げ、その中で一番重要とされる課題を特化して長期目標とし、その目標をクリアーするためどのような課題が必要かを半年間ずつの短期目標であげ、前期後期のスモールステップで個別の指導計画を立てた。その計画を振り返る意味で評価を行う。総括評価となっている。ネットワーク表、移行支援計画、すべて含めて個別の教育支援計画となっている。ネットワーク表は、子どもたちが通っている訓練機関相談施設一覧表になっている。どのような機関に通っているかも分かるようになっている。

移行支援計画は進路部が中心に行っている。4月から記入を始め、前期の指導計画まで書き終わっている段階です。「作成について」には具体的にどのようなスケジュールで行っていくか、活用の仕方、保管方法などが具体的に明記されている。個別の教育支援計画のアンケートの結果であるが、意外と書きづらいなど、反省が出ているが、「書きなれること」が必要で、「様式・システムについて今後もう少し検討し修正していきたい。

今年度、自分が記入してみた感想としては、一緒に授業を行った人たちみんなまで計画について話し合えたことが良かったと思う。家庭訪問や懇談等で個別の教育支援計画を通じて話し合い、果敢に意見交換をしたり、子どもについての共通理解が出来てよかった。何を書いたらいいのかわからない状態だったが、実際に書いて話し合うところで検討メンバーの中で方向性がある程度出てきた。今後こうしたアンケートや職員の意見を受けて検討や修正をし、箕面支援で使いやすい個別の教育支援計画になるといい。

司会：今までは校内の書類だったのですが、関係機関との連携や子ども情報を集約し、またネットワークを活用し支援に役立てようということです。昨年試行、本年度実施という段階です。

Gさん：可能な子どももいるかもしれないが、個別の教育支援計画を策定するときの関係機関の支援者が一同に会しての支援会議を行い策定していくことになっているが、現実的には難しいと思います。

関係機関との連携の工夫はどのようになっているか、持ち回りで持っていくとか、保護者が持ってきてもらっているとか、一同に会してというのが難しい会議することになっている現状の下でどのようにしているのか。また、関係機関とは十分連絡なく名前だけ入っている場合があり、関係機関が知らない、ただ連絡先だけ入っているという現状がある。これでいいのでしょうかという質問がある。基本的に関係機関が連絡を取った場合、「書かれている」ということを知らない、という現状が出てくると困る。やはり関係機関との連携で策定していくときのルールとして「連絡先を記載します」ということの了承を得ておくことが大事と思う事と、長期的なプランの視点が意外と難しい。保護者も3年後6年後、つまり長期的な計画を作る習慣がなかった、関係機関との連携はすすんできても長期的なプランが進みにくいという現状も他の学校もある。この2点についてどのように試行のなかを進めているのか、聞かせてほしい。

個別の教育支援計画委員会代表：関係機関との連携で、ファイルを一冊にまとめて子どもの情報をまとめそのファイルを持って関係機関に相談に持っていけたらいい、それを基に子どものことを話し合うときに個別の教育支援計画を使えたらと思っている。なかなか個別の教育支援計画を持って相談するまでは今のところない。そこでどのようなことに配慮すればいいのか、プライバシーなど相談してどのように進めていくかがまだ難しい。いろいろな機関と相談を持っていけたら、個人情報利用願いや個別の教育支援計画を他機関に持っていって相談する際の手続きなどを整備しているが、具体的には活用はまだできていない。

アンケート結果にもあるが、数年先の保護者のニーズを元に長期的な支援計画を策定するということを出ている反省として「数年先の目標が書きづらい」「今まで1年のスパンで書いてきているのを数年先を見越して書くのは難しい」という意見がたくさん上がっていた。

Bさん：先日ケースカンファレンスを行った。何か問題や課題が挙がった時に、コーディネーターは誰でもいいと考えてはいるが、先日は施設のスタッフがコーディネーターになり、市のケースワーカーと生活介護事業で介護保険法とも関係ある中途障がいの方なので保健師さんとそこに関わっている方と一緒に精神科のドクターも交えてカンファレンスした。全部が全部、関わっている事業所全部で話し合うというのではないですが、大きな問題や課題が挙がったときは、関わっている事業所とできるだけ、できたらドクターも交えて、お医者さんが難しいときはそれ以外で何ケースかカンファレンスをしている。その時も一番は市のケースワーカーさんにはお願いしている、市の行政機関も入るようにしている。子ども支援室の方もおられるので、知的障がいでもんかん発作が多い利用者さん、ご家族の生活基盤が揺らいだ方なので次への暮らしの場ということで、市だけではなく大阪府下の課題になってきたので、府の連携も行いケースカンファレンスを行ったこともある。そのときによって集まるメンバーは違うが…すべてのというのは難しい。

Dさん：箕面支援学校に通われている方で担任の先生から相談を受けて話し合いを持ったケースに関わった時、教育支援計画を持ってきていただいて、こんながあるのだと思ったことがあります。

地域連携部代表：昨年度末に中学部のことで話し合いを持った時に、資料ということで学校での取り組みということでそのときに活用した。短時間で共通理解を図るためにということで資料を使ったことがある。

Fさん：支援学校や保健所の保健師、子ども家庭センター、市民病院のドクター、保育課、幼稚園課、教育センター、教育委員会、16者があつまり、また知的障がい児の通園施設、肢体不自由の通園施設、地域支援センターなど全部集まり会する会議があります。箕面支援学校の先生にも参加していただいている。その中でも個別支援計画も同じような形で、就学前から続けてこれを見るだけでその子の状況が解ることでは考えていけないといけないのでは。各学校にある資料を持ち寄ってどのように活用するかを検討しているところです。

Eさん：直接担当してなかったのが初めて見せてもらう。児童養護施設に入っているお子さんなども毎年支援経計画の見直しをしており、状況がかわってきていますのでこのようなことが必要なのでは。学校でもこのようなことが求められるのでは、内容もさることながら会議を開いて個別の支援計画をみんなで見直すというそのものも大事なのではと思う。

Cさん：計画が重要。まさに計画ありきと言っていいようにプランが大切なので、プランがしっかりしていないとチェックするにしても、修正して改善するにしても最初のプランはどうなのか、そういう意味では非常に重要な資料だと思う。以前は養護学校だったので、支援学校になってはじめて支援計画があるんでしょけれど、まず養護計画から支援計画がどう違うのかということから明らかに、実際のアクションプランは細かい問題があると思うが、様式も大事だが、何をどのように改善しているのか変えないのかを養護から支援へという意味があるのではと思っている。ネットワークをどのようにしていくかという計画がないといけないのでは。関連機関の問題だが、我々も関連機関といかにネットワークを作っているが、相手方のキーパーソンの人の問題、地域の中でかなり長期的にもやっていただけないといけないし、毎年変わるようではネットワークを作りにくいと思うので、箕面支援の先生方も、ぜひ顔を売ってもらって、進めてくのが重要であると思う。

Aさん：私はこの協議会設立当時から関わっているので流れや活用など、表の作り方など、ようやく動き出したというのが実感。保護者は長期の計画を立てている方もいらっしゃるかも知れないが、お子さんの身体の状態によって長期を立てるのは難しい方もおられる。3年と言われても3年先は見えない方もおられる。体調の変化のある方は1年先でもいいのかと思う。もう少し楽に考えていただけたらと思う。3年先ではなく自由に書けるようにしていただけると、親のほうも毎年見直すのであれば、今度は2年先を見直してみようと思う方も出てくるのでは。私は関連施設に持っていったことないので、訓練施設や病院などはこのように書かれていることは知らないだろうと思う。

個別の教育支援委員会代表：情報は保護者の方から預かっているものなので学校から関係機関の連絡先へは教育支援計画を作っているとは知らせていない。保護者の方にゆだねている。この計画を作ったときから方向性がないと書きづらいたらうということが予想できたので記入ガイドを策定したり、実施する前から校内研修を学部ごとで実施した。3年先という目標のところでは絶対ではなく、何年か先で目標が設定できれば・・・そういう意味で3年程度でということである。中1であれば中3、高1ならば高3という入学から卒業程度のめどで考えるのであれば目標を立てやすいのではないかと考えている。

Gさん：保護者には、目的と趣旨が伝わっていますか。PTAの研修会で教育支援計画を持って説明しに行くことがある。意外と小中高の中で小学部は来ないことが多い。小学部は入学したばかりで、まだ先のことで動いてない。小学部の取り組みが全体的に進んでいない。小学部が遅れている。支援学校では今までは小学部から進んでいくことが多かったが・・・。高等部の卒業するとき切実になってくるという現状がある。保護者が参画、保護者が作っていくという意味では保護者がこの趣旨を解ってもらって頂かないと教員もその気になりにくいと思うのですが、ここまできたら保護者がその意味を理解していかないとと思うが、この辺は説明などどうでしょうか。

Aさん：これを作成するに当たっては、各学部懇談の時に全体には書き方も含め話がありました。確かに小学部1年生の方は卒業まで12年ある。PTAの方は卒業後に向けての企画もしていますが、卒業された後援会の方を招いて卒業後に向けてのお話をするにあたっては高等部の方の参加が多い。今年も個別の教育支援計画が始まったので、ヒントを後援会の方からいただこうと思い情報交換会をするのですが、アンケートをとってもなかなか集まらないという状況です。保護者も今年からということで、まだ浸透はしていないのかなと思います。

Gさん：その辺が双方でうまく進んでいけたら。保護者と子どもたちが地域の中で安心して生活していくことの目的が大きく、一番知っている人が保護者で、次に学齢期で知っているのが担任の先生、なので1番知っている人と2番目に知っている人を中心に作っていきましょう、そして何かあった時に、必要なときに関係機関に行って一から説明するのではなく今までの経過を言えるように。また知っておいてもらおうと連携もしやすいということです。保護者本人が地域の中で連携がとりやすいように作っていかうというのが目的だと思います。ですから移行するにあたって保護者が持っていく。関係機関との連携をより機能的に進めるときにこのツールがあるのだらうなと思います。関係機関の連携があってこれを使うのではなく関係機関との連携にこういうものをもって行って、これを使うなかでより連携を深めていく。3年6年というのはその子に応じたプランでいいと思うのですが、いずれにしてもちょっと先のプランというのはどういうものなのかという具体的な例示を示していかないとわかり難い可能性があると思う。保護者も3年先6年先のプランを言語化する習慣はなかったので、

それに対して具体的にどんな風なものなのかを例示していくことも必要なのでは。この辺のところは他の学校も見させていただいても、関係機関との連携は出来ていても長期的プランが詰まっていることが多い。この例示を考えて進めてほしい。

それから、実際にあったのは、私も関係機関の一人になっていたというケース。ある時ある先生が来て先生の連絡先があったので保護者の了解をもらって来たという。この人とそんな連携をとっていたかあとわからなかった。ある保護者から一度電話の相談があったので、相手はもうすべて分っていると思ったのでしょね。私の名前を連ねて関係機関に書いていた。それは迷惑ではないが、事前に話がなかったので分らなかった。知りませんよということになった。これは他の機関でも起こりうる話です。連絡先について保護者から聞いてそのまま書いている場合があるが、事前に相手と確認してから連携する方がいい。

Dさん：今のお話で、相手の方が名前を書きとめておられて、関係機関から電話をもらってびっくりという話があったが、ありえると思う。私の機関でも一回でも相談したら、どんな内容の相談でどういう形で終わったのか、記録を残すようにしている。少し聞いただけでは継続的にはつながらない、具体的に取組んで行かないこともあるので、相手の連絡待ちの状態になることもある。担当者がいないときにまた来られる事もあるので、相談リストとして書面に残すようにはしている。相手の方が箕面支援に通っていると聞くと、関係機関として支援学校と書いている。カンファレンスや相談も状況に応じて声をかけていただいたら最初はわからないこともあるかも知れないが、こちらで関わっている情報も共有できると思う。

司会：個別の教育支援計画を作ることによって機関と連携してその子のためのいろいろな支援をしていこう。もうひとつは地域連携として小・中への巡回相談、給食指導などいろいろな教育支援をしている。今年度、最近の支援の様子を書いたプリントをお配りした。リーディングスタッフとして、あるいは地域連携部として何名かで分担をして小中・保育園・幼稚園など要望があって行かせてもらっている。こういうことも動き始めています。先日も給食の様子を見て頂いたり、施設の方から感想とか要望はどうでしょうか。

Fさん：親と一緒に学校見学に行った。STと調理の給食担当者と見学に来て、特別食・除去食を見せていただいた。箕面支援やあいほうぶ吹田を見学させてもらい、本園としての系統的な考え方を確立したい。こちらの方で配慮されていることがきめ細かくされていることが参考、勉強になった。自分たちのやっていることを再確認するという意味でも参考になった。

Bさん：電話などでの相談もあるし、うちの福祉会でも児童や身体の地域生活支援事業で相談があるので、そこでリハビリスタッフとつながったり、系統だってではないが横とのつながりや、市内に無認可の作業所と医療相談とかで嘱託医との相談なども含めて連携をとらせてもらっている。臨機応変にやっているし、地域に配っているニュースで医療相談があるので声をかけてなどお伝えしている。高齢者のデイサービスなども連携を取り始めている。

Gさん：資料には豊中からの要請が多い。今までのことから考えるとこれはすごいこと、連携が進んできているのではと思う。逆に支援学校の教育内容の情報がない。人が見えてくると依頼が増えてくるのでは。できるだけ支援学校でどのようなことをしているのかを提供できると、双方の交流になる。支援学校での内容や提供できるメニューをどう伝えていくかが大切。積み重なると一回来たところは、またもう一度ということになる。そういう意味で意外と支援学校のことを小中高と知ってもらっていないのでは。支援学校の幅広い内容を発信できていけるとうれしい。

地域連携部代表：箕面市から始めているが、本校はもともと肢体不自由養護学校だったので、あえて肢体不自由のお子様への教育相談を中心にしていた。発達障がいや知的、自閉症のお子さんの相談が多く、豊中養護も相談件数が多かったのですが、いろいろやっていく中で、少しずつ肢体不自由のお子さんも忘れないでください、肢体不自由のお子さんにも相談していいんだなあということ地域の方が気づいてきた、発達障がいのお子さんじゃないと相談していけないかと思われていた。そうではなくて特別支援というのはみんな、重度の方も含めての特別支援だ、というのが広がってきた。今年特に相談件数が増えてきた。昔あった養護学校と地域の学校との垣根が低くなり、少しずつ顔がつながる中で気軽に電話でとか相談されるケースが増えている。肢体不自由のケースが増えてきていると

というのが私としてうれしいことだと思う。そういう意味での連携は少しずつ広がっているのかなあ実感として感じている。支援学校としての地域への発信方法として、新しいことをいっぱいするというのは私たちもめいっぱいなのだが、今あることを発信していくという事では、専門性という事で、校内で行っている研修を地域に発信していく。箕面支援では医ケアが進んでいて、医ケアの研修会のお世話をさせてもらう形での発信や、逆に来て頂く事でつながったり、学校の様子や子どものことを見て頂いたりして広がっている。小さな力ですけどそういう形でやっていければと思っている。

司会：地域から支援の要望があるところへは、分担して行っている。なかなか出て行くのもしんどい時もある。

Cさん：この支援活動というこの仕事、この仕事、務は勤務の中にあるのか外にあるのか、非常に重要な問題では、地域に根ざすものとして、支援活動、センター的機能この仕事は先生方からすると勤務の中にあるのか、それとも外にあるのか。地域の場合は夜も行く場合があるのでは。

校長：具体的場合はそういうことも在るかと思えますけれど、地域に対する支援というのは支援学校の業務の一つとしてやっている。もちろん教職員の本務としてやっている。

Cさん：時間を与えないといけない。その辺の時間割シフトはどのようになっているか。

校長：教育委員会の方からは非常勤講師時間を8時間もらっている。他の教員の時間より校内での勤務の時間・授業数を少し減らしているが、必ずしもそれが十分ではないので、しんどい部分もある。

Cさん：根っこのところなので制度上もルール上もしっかりさせていかないといけない。たとえば今月納涼大会がありますが、私どもは全員ボランティアで行っている。業務外で行うとはっきりさせている、無給なのです。そのようにして行くことが正しいかどうかは別にして、地域へのネットワーク作りということになると、そのあたりの微妙なラインが出てくる。ルール化するのは難しいというのは解るのだけれどある程度、学校ごとの、大阪府教育委員会がどうかは別にして、はっきりしておかないといけない。

余談ですが私はスペシャルオリンピックスという活動をしている。北摂エリアでは活動がゼロ、北大阪では寝屋川支援が学校を中心に行っている。そこの教員の方がやっている。東大阪もそう。特別な方がボランティアで活動を行っている。やればやるほど問題が出てくるのかなあと感じる。個人的な動きもそうですし、学校としてもどうなのか、悩ましい問題として出てくるのかなあと。ぜひ北摂でも活動拠点を作って2010年大阪ナショナルゲームで行う。コーチなどの仕事を、先生方にボランティアとして頼めるのかなあと思う。この辺も含めて、地域との、あるいはボランティア活動が先生個別にとっては大変重荷になると言いますが、思いの問題だと思うのですがネットワーク作りと言っても、人が行うわけなので、どういう人がやるのか、箕面支援として地域に対して何ができるのか、教育支援以外に何が出来るのかというメニュー、プログラムがいるのではないかと。地域の人が見てこれができるのかということになっていくと思うので、その時に必ず人の問題が出てくるので、その人のコントロール難しいのではと思う。

司会：夏休みのキャンプのボランティアなど教員もできるところは行っている、難しい面もありますので土日の出勤の代休の処置なども行い、適宜対応するようになってきている。どういうところに行くのかの線引きは難しい。地域の中で貢献できること、どれをどうするかが難しいが、考えながら徐々にできるようになっている。

Cさん：人の問題難しい根っこのところが人ですので、学校として準備いただかないといけない。学校としてできる事を模索していただきたい。先生方、私の意見に意見はございませんか。

教務主任：夏休み中のキャンプを何回か行ったことある。一般的にボランティアで行かれています方は学生が多い。大学生の車椅子の押し方など見ていると不安に思うこともあった。また、あるキャンプの中で水泳指導の中で呼吸をいい加減にしている、怖く感じた。支援学校の教員だったら誰でもできる当たり前のことが、一般の方はご存じない。われわれの日常のことが、出て行く中で示せたら。出張は難しいが、いける限りは行きたいと、100人以上教員がいますので、行こうという教員いるので

はないか。あとは個々の対応である。

Eさん：教育支援計画を、職員に徹底して定着するのが難しいのでは。私たちも虐待を受けた子どもたちのアクションプランということで当面の目標、長期的の目標を立てている。見直しの時期など計画を立ててやっている。なかなか仕事に追われて予定通り進まない。記入の仕方がわからない、保護者、学校施設と連携しながら行う、しかし連携するにも時間が合わない場面とか・・・課題かなど。やはり見直しを行う時期、評価など計画を立てたとき次の見直しの機会はいつか、子どもたちは変化していく事が多いので。

Dさん：計画を立てるのが保護者の方も難しいと思うのですが先生と面談して話し合い記入すること自体が大事だと思う。

Fさん：個別支援計画の中でその子どもを長いスパンで見っていくという所では始まったばかりであるがどのように活用されるのがこれからの課題になってくると思う。就学前も加え、就学、そしてその後どうなったのか、つなぎを機関間で連携していければケースごとの予想もつきやすくなるのでは。就学させる側なので引き継ぎの面など、機関間で連携できていけたらと思います。

Cさん：テーマとしては特別支援学校の役割、中身としての個別の支援計画で言いますと個別支援ネットワーク表の分類の仕方ということで暮らし、学校外、医療、学校関係その他と分類されている。たとえば医療については、ネットワーク表をどのような使い方をするのか、保護者の方が行っておられる病院などの過去の事を書くとともに、「あの先生はすごい」など地域の優秀な医療機関などの情報をプランに織り込んでいくなど、ぜひ今後の議論の中でやっていただきたい。

特別支援学校の役割の中で人の問題と同時に、学校として大阪府としてお金の問題をどういう風に考えていくのか、それから情報の問題をしっかり裏付けを取っておかないと絵に描いた餅になるのではないか。

Bさん：先ほど先生から「教育支援で顔が見えるようになって連携が多くなった」と聞き、確かにそうではと思っている。私の施設も地域の高齢者の施設と一緒にボランティア講座をやるということになり、集まり話し合い情報の交換を行った。その中で「うちではこのような事業をやっている」などからPTの派遣をするようになりいろんな連携が出てきた。「顔が見える」行事を一緒に企画する、ニュースをお互いに配るだけでもまた違うのでは。そのような「顔が見える」情報から支援学校の技術が地域に還元される、伝わっていくのでは、キャンプのときの話も「顔が見える」つながりになるのではと思いました。個別支援計画ですがうちでも自立支援法になってから取り組んでいます。立てたらほっとするというのもあるが、お互いに評価して家族の方と一年に一回、個別支援計画を真ん中にして利用者さんを真ん中にして個人懇談で一年を振り返り次年度の計画にしている。また話しをしてお互いに評価するのは重要である。

Gさん：これだけの様式や手順が整いスタートされる、どのように進むか、新しいことを行う時にはいろんな声が出てくる。めげずに保護者のため、子どもたちのため作っているのだ。今年から小中も教育支援計画がはじまる。ですから支援学校がやってないわけには行かないというのが現状です。全体の府の中での施策で小中学校に具体的に下ろしている。ぜひ支援学校に質問に来たときもいろいろ求められるのでは。子供たちや保護者の中でこんなサポーター機関に、相談可能な所があってこんな風にやっていける、つまり困った時にどこに相談できることがあるということが大事なことです。計画自体が元気の出るものであってほしい。まず支援学校の教員がチームで作っていることをどこかで入れて欲しい。教員の力量によって出来ばえがずいぶん違うということは困ることが出てくる。保護者としてしっかり連携とりながら一緒にやることを前提に。再構築していく機会に。ぜひ保護者と連携を新たにしてくるツールにそして、保護者のほうにもそういった事を伝えて何のために作るのか、卒業後にはそれをもって社会に出ていくということ、そう言った事につながる事は小学校だから早いのではなくてその時期から積み重ねて行くことが大きなものになるという意味で双方で作っていく形を進めていけるよう、2学期の段階の今年の取り組みを楽しみにして行きたいと思います。

Aさん：教育支援計画の中にもありますように保護者の意識も大切だということがわかった、保護者にどのように意識させていくかなかなか難しいかなと痛感している。学校と連携してやっていけたら

良いかなあと、この協議会で参加するとそのあたり、小学部から保護者に卒後についてという話を行っているが、保護者には周知されていないという面も事実かなと思う。議事録も配布されていると思うが、読んでおられるかと思うが読んでおられない保護者の方も多々おられるのかなあと思うので、個人懇談、学部懇談、いろいろ保護者と接する機会があるかと思うのでその時に保護者との連携という意味では話しする機会を、少しでも持って頂いたら保護者のほうも理解が進むのではその辺も一緒にやっていただけたら。

Cさん：保護者の自立も大事。何でもかんでも学校に頼りっぱなしではだめ、頼りすぎると共に作ろうということにならないと思うし難しい。支援は自立支援なので親も先生も自立したものでないと。

Aさん：関係機関との連携ということで保護者と教員と連携をはかる一つの手立てとして、病院側にこの支援計画に病院のことが載っていますということ、保護者を通じて言ってもらうことにすると、担任と保護者が話しする機会、保護者が病院と話をする機会、そうすると学校から病院に直に連携はとりやすくなるので、もしも載せたことを保護者から主治医なり訓練施設なりに一言声をかけて頂くような、学校からはお願いになるかと思うのですが、そうすると保護者も病院で聞かれたときに説明することになるので、保護者が考える事になるのではと思いました。

司会：色々なご意見いただきまして有り難うございます。まだまだ始まったばかりで見直しやを改善をしていかなければと思います。次は12月18日木曜日ですが、今回は医療的ケアという面を中心にお話をしていただければと思います。貴重な意見有り難うございました。